

JR西日本財団 NEWS

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229

E-mail: jrwestaidan@westjr-anshin-f.jp http://www.westjr-anshin-f.jp/

2011.3 発行 Vol.3

CONTENTS

- 1 ▶ 「こころのセミナー」を開催
- ▶ 助成先紹介
- 3 ● 上智大学グリーンケア研究所
- 4 ● 関西いのちの電話・神戸いのちの電話
- 6 ▶ 公募助成事業
- 8 ▶ TOPICS
- H23 年度の主な事業計画など

「こころのセミナー」～『いのち』を考える 支え助け合う社会をつくる～ の開催

1月23日(日)、苦悩や不安、悲しみを抱える方々に心の癒しを提供し、すべての人に支え助け合うことのすばらしさを実感していただきたいとの思いから、当財団として「こころ」をテーマとした初めてのセミナーを開催いたしました。

第1回目となる今回のセミナーには、諏訪中央病院名誉院長の鎌田實さんと「あしながレインボーハウス」チーフディレクターの八木俊介さんをお招きしました。参加者の中には講演に涙する方も多くおられ、講演者と参加者との思いが繋がるとともに、「こころ」と「いのち」のつながりが強く感じられるセミナーとなりました。



鎌田 實 (かまたみのる) さん

諏訪中央病院名誉院長・作家。1948年生まれ。東京医科歯科大学医学部卒業。36年間、医師として地域医療に携わり、チェルノブイリとイラクの救援活動にも取り組む。2003年NHKラジオ「鎌田實・いのちの対話」の放送を開始し、現在も全国各地より公開生放送を続けている。2009年ベスト・ファーザー イエローリボン賞(学術・文化部門)受賞。ベストセラー「がんばらない」をはじめ、「空気が読まない」「よくばらない」「ウェットな資本主義」「人は一瞬で変わる」など著書多数。

講演テーマ：『いのち』を考える ～支え助け合う社会をつくる～

人は「こころ」があるから生きていけるのですが、「こころ」があるからつらくなることもあります。20世紀最大の精神医学者であるフロイトは、人間はどんなに苦しい状況に陥っても、この2つがあれば生きていくことができると言いました。一つは「働くところがあること」、一つは「愛する人がいること」です。「愛する人がいること」は、人間が生きていく上でとても大事なことなのですが、一方で愛する人が傷つくと、人間はなかなか立ち直れません。今日は、今回のセミナーのテーマでもある「こころ」というものを考えてみたいと思います。

5年前、私は新聞でパレスチナ人の12歳になる男の子がイスラエル兵に銃撃され脳死状態になったにもかかわらず、そのパレスチナ人の父親がイスラエルの病気の子どもを救うために息子の心臓を提供した、という記事を見ました。私はその記事が忘れられず、昨年パレスチナを訪問し、息子の心臓を提供したパレスチナ人の父親と、心臓移植を受けたイスラエル人の女の子とその家族に会いました。パレスチナ人の父親は言います。「もし川で溺れている人がいたら、その人に国籍や宗教を聞かないだ

ろう。泳げる人だったら、川に飛び込んで助けるだろう。自分はそれをしたただけだ」と。移植を受けた女の子の母親はこう言います。「自分も母親だから、相手のお母さんの気持ちを考えると、さぞつらかったと思う」と。宗教が違って、国が違って、文化が違って関係ないのです。「こころ」があって、その「こころ」がどこかで共感し、共鳴し、つながったときに大きな力になるのです。

私の父は、貧乏で、女房が重い病気をかかえているにもかかわらず、行き場のない私を拾ってくれました。人間の行動はたいてい「…だから、…する」です。良くしてもらったからお返しをするなど、多くはそうして生きていくわけです。しかし、人間の人間らしいところは「にもかかわらず」なのです。父が「にもかかわらず」私を拾い、育ててくれて、私の命につながるわけです。こんなことができるのも「こころ」があるからです。

母が倒れ、脳死状態になってから亡くなるまでの1週間、これは父にとって大事な1週間だったと思います。私はその時、私自身の人生哲学や生き方を押しつけてはいけなかったと思います。その人にとって○(丸)に近い△(三角)に近づけようと、専門家も家族も友人も地域の人たちも全力で考えることが

大事なのだと思います。「いのち」や「こころ」にかかわることは、絶対にこれが正しい、ということはありません。

四国のある小学校には、子どもたちが自分でお弁当を作る「弁当の日」があります。ある日、「大切な人にお弁当を作りなさい」ということで、5年生の女の子がお弁当を3つ作ったそうです。一つは月曜から金曜まで大阪で働き、週末だけ家に帰ってくるお父さんに、もう一つは入院中のおばあちゃんのために。女の子は学校から帰ると、お母さんから「お父さんは泣きながらお弁当を食べてくれたよ、おばあちゃんは拝みながら食べてたよ」と教えてもらいます。そして残りの一つは、女の子自身のために作ったのだそうです。もちろん学校の先生は何も言っていません。この想像力がすごいです。人は「自分を大切にすること」に気づき、そして「周りの人を大切にすること」を学びます。子どもは、まず愛されることが大切ですが、もっと大切なことは人を愛することです。何かしてもらって「ありがとう」と言うことも大事ですが、誰かに何かをしてあげたら「こころ」はもっとうれしくなります。

(次ページにつづく)

(前ページよりつづく)

何か失敗があった時でも「ごめんさい」と言えば許される、それで「こころ」は癒されていく。ミスのない人間なんていません。私は18歳のころ、父にひどいことをしました。人の心はまだらです。私の中には「あったかいこころ」もありますが、「冷たいこころ」もあります。これが人間の「こころ」です。だからこそ、良い部分と良い部分がつながっていくことが大事だと思うのです。人間は失敗をするのです。一度失敗すると立ち上がれない、そんなことはない。反省することです。素直に謝ることです。

日本では13年連続で年間3万人以上が自殺しています。先進国の中でこんなに「こころ」が病んでいる国はありません。日本が弱く、あやふやで、冷たい国になりだしているのは、「こころ」が弱くなっているからではないでしょうか。この財団が、「こころ」に光を当てたセミナーを開催したのは非常に時宜を得ていると思います。みんなが自分たちの「こころ」を磨き、お互いを磨き合っていけば、日本は変わることができます。

昨年、『人は一瞬で変わる』

という本を出しました。変わらない人なんていないのです。一人ひとりが少しずつ変わり、一人ひとりが強くなって、この国を、働ける場所があり、好きな人と一緒にいられる、そういう当たり前の「強くて、あったかくて、優しい」国にするために、今がとても大事なときなのです。この「こころのセミナー」が、みんなで新しい時代を作っていくきっかけになることを願ってやみません。



八木 俊介 (やぎ としゆき) さん

あしなが育英会 あしながレインボーハウスチーフディレクター。1969年生まれ。10歳のとき父親が交通事故死。遺児の奨学金で大学進学し、1993年あしなが育英会へ入局。1995年、阪神・淡路大震災直後より神戸にて勤務。4年後、国内初のケア施設となる「神戸レインボーハウス」の開設に携わる。その後、トルコや中国・四川、ハイチ大地震遺児の心のケアに現地で行き届く。現在、東京日野市の「あしながレインボーハウス」にて全国の病気、自死、災害遺児を対象にして活動中。

講演テーマ：「親を亡くした子どもたちと寄り添って」

あしなが育英会では、様々な理由で親を亡くした子どもたちへの支援を行っています。1995年の阪神淡路大震災では、あしなが育英会のメンバーが被災地に入り、新聞記事をもとに親を亡くした子どもを尋ね歩き、約600名の震災遺児を確認しました。しかし、当時のあしなが育英会の活動は遺児たちへの奨学金貸与が中心であり、どのように子どもたちに手を差し伸べればいいのか全く分かりませんでした。

黒い虹の絵を描いたりする子どもや「自分も死にたかった」と訴える作文を書く子どももいたりするほど、子どもたちは心に深い傷を負っていましたが、そういった子供たちをケアする場所や施設は日本中のどこを探してもありませんでした。その後、遺児ケアを専門に行うアメリカのダギーセンターを参考に施設をつくることになるのですが、黒い虹がいつか明るい色の虹に変わってほしいという願いを込め、「レインボーハウス」と名付けました。

レインボーハウスを運営していく中で、2つの大きな悩みがありました。一つは、遺児の多くが、「自分のせいでお父さんやお母さんが死んでしまった」と強い自

責の念や罪悪感に囚われており、そうした子どもたちをどのようにケアしたらよいか分からなかったことです。ダギーセンターに問い合わせても、「子どもたちの自責の念や罪悪感が消えるには、非常に長い時間が必要だ」と言われるばかりでした。もう一つは、震災で両親を一度に亡くしてしまった子どもたちに、何と声をかけてよいか分からなかったことです。

子供たちの悲しみや苦しさといった感情の表現の仕方はそれぞれです。レインボーハウスでは、まず子どもたち同士で交流し、亡くなった親や家族のこと、自分の悩みなど話しやすいよう工夫しています。話したくない子は話さなくてもよく、人の話を聞くだけでもいいのです。たくさん遺児の仲間や、ファシリテーターと呼ばれる、心のケアボランティアと出会うことがとても重要です。

阪神淡路大震災から16年を経て、レインボーハウスに通う子どもたちは少しずつ成長し、最近では、海外の震災遺児たちのために率先して募金活動を行ったり、実際に被災地で遺児支援に携わったりするまでになりました。震災で大きなショックを受けた子どもたちがここまで成長するとは、当時では想像できませんでした。子どもたちが活躍する姿は、多くの人に勇気や希望を与えます。

私が何故、今でも遺児のケアに携わっているのか。それは子供たちを支えてくださる、あしながさんやファシリテーター、ボランティアの方々の愛情に、私自身が感動したからです。私も高校生の時に交通遺児たちの恩返し運動と出会い、自分でも誰かの役に立てる、誰かに恩返しできるんだと思ったからです。

レインボーハウスのために書かれたような、そんな詩を見つけました。

終わらない夜がないように
止まない雨ががないように
果てしない悲しみが
どうか、ありませんように
冬があるから春がまぶしいでしょう
(作：澤田 直見さん)

あしなが育英会では、今後ともレインボーハウスでの活動をはじめ、すべての遺児のために様々なケアを行っていきたく考えています。子供たちの「自助と連帯」を大事にしなが、あなた一人じゃないということ伝えていければと思っています。



【こころのセミナーに参加された方からいただいたお声】

- とても癒され、元気づけられ涙が溢れました。前向きに生きていこうと思いました
 - 今回のセミナーをきっかけに私は変われると信じ、そして変わりたいと思いました
 - しばらく忘れていた人間の温かさ、優しさ、助け合うことの大切さを感じることができました
 - このようなセミナーは是非続けてほしい
- など、参加された皆様からたくさんコメントをいただきました。本当にありがとうございました。

公開講座
「『悲嘆』について学ぶ」

愛する家族や親しい人を失った後や死期を知ったことで体験する複雑な情緒の状態を「グリーフ（悲嘆）」と言います。上智大学グリーフケア研究所では、「事故や事件、災害、病気等により愛する人をなくした方の悲しみ、苦しみに共感し、ともに歩む」ことを目的に、公開講座「『悲嘆』について学ぶ」を開講しています。一般市民向けの公開講座として、平成 19 年 10 月に始まり、平成 23 年4月より第8期公開講座がスタートします。



第7期公開講座（昨年 12 月 17 日）で「ターミナルケアとグリーフケア」をテーマに講演いただいた関本雅子先生にお話を伺いました。

関本 雅子（せきもと まさこ）さん

関本クリニック院長。1949 年神戸市生まれ。麻酔専門医。六甲病院緩和ケア病棟医長を経て、2001 年 10 月より関本クリニックを開院。在宅ホスピスケアの提供をいち早く取り入れ、ターミナルケア、ホスピス・緩和ケアにかかわる活動をされている。本公開講座では第1期、第7期で講演。

一ターミナルケアと悲嘆（グリーフ）についてお聞かせください。

患者さんが存命中に、死別を予期したときに起こる悲嘆（予期悲嘆）に陥るご家族の方がおられますが、その段階できちんと親族や医療者、第三者が対応することで、亡くなった後の悲嘆の症状をずいぶん軽減できるのではないかと考えています。一方、患者さんを一人で見ていて、亡くなられた後も傍らで支える方がいない場合などは悲嘆が強くなります。

ターミナルケアでは、医療者が予期悲嘆の段階からご家族に関わることができます。病状の進行など今後起こりうることを私たち医療者がご家族に対し事前にきちんと説明したり、亡くなった後に生前のことを共有、共感できる親族などが周りにいたりすることが、悲嘆の症状を軽減するために何より大切だと思います。

一悲嘆を抱えている方と向き合う時に大切なことは何ですか。

こちらの思いを絶対に押し付けられないことです。本音の表出を待つしかないと思っています。そして、“あなたのことを心配している人がここにいますよ”というサインを常に送り続けることが重要です。

一クリニックでの新たな取り組み、家族会についてお聞かせください。

昨年 11 月に初めて、グリーフケアを目的とした家族会を開催しました。ご家族の辛い状況に接してきて、以前からぜひとも家族の方に集まっていたく場を持ちたいと思っていたのですが、規模の小さい

クリニックではなかなか難しいのが現状です。大変ありがたいことに今回参加した何名かのご遺族が、会のお世話をしていただけるボランティアに手を挙げてくれました。ご自身が体験したからこそ伝えていけるものがあり、気付くこともあると思います。今後ごんまりとした気軽な会にしていきたいと思っていますが、念願かなってようやくスタートできました。

一グリーフケアの現状をどのように感じておられますか。

今は医療者等がボランティアに近い形で行っているのが実状です。医療現場や行政がグリーフケアの必要性を認識して、組織的、制度的な裏づけのもとに行っていかなければならないと考えています。

上智大学グリーフケア研究所で悲嘆に関する公開講座がずっと続いているということは、一つの大きな動きです。この講座によって、多くの方が悲嘆を知り、グリーフケアの必要性を実感していただける機会が広がったと思います。

一最後に公開講座の受講生に伝えたいことはありますか。

悲嘆やグリーフケアへの関心がおありであるということ、とりもなおさず命に高い関心をもっておられるということ。講座を受けられた皆さんには、“命は大切であり、慈しむべきものである”ということを広く伝えていただきたいと思っています。

第8期 公開講座カリキュラム

※金曜日 18:00 より開講

平成 23 年4月より開講する第8期公開講座の講師の方をご紹介します。

◆既に多数のお申し込みをいただいたため、受講受付は終了しています。



4月 8日	高木 慶子	(上智大学グリーフケア研究所所長) 悲嘆の実態 1
4月 15日	山折 哲雄	(国際日本文化研究センター名誉教授、上智大学グリーフケア研究所客員研究員) 遠藤周作の場合
4月 22日	入江 杏	(ミユカの森主宰、絵本作家 (世田谷一家殺害事件遺族)) 突然の別れと悲しみからの再生—犯罪被害の現場から—
5月 6日	たけなが かずこ	(マザーリング研究所所長 (夫を亡くした遺族)) 愛する夫を看送って
5月 13日	池長 潤	(大阪大司教区長大司教) カトリックにおいて死とは何か
5月 20日	河野 義行	(著述家 (松本サリン事件被害者)、リカバリーサポートセンター理事) 命あるかぎり—松本サリン事件を超えて—
5月 27日	島藺 進	(東京大学大学院人文社会系研究科教授、上智大学グリーフケア研究所客員研究員) 悲しみの創造性
6月 3日	若林 一美	(立教女学院短期大学学長、ちいさな風の会) 悲しみを通してみえること—遺族の会、24年の実践活動を中心に—
6月 10日	日野原重明	(聖路加国際病院理事長・名誉院長、上智大学グリーフケア研究所名誉所長) 悲嘆 (grief) の中に何の芽を育むか
6月 17日	豊原 大成	(浄土真宗本願寺派西福寺住職、前東京築地本願寺輪番 (阪神淡路大震災遺族)) 悲しみを越えて
6月 24日	内藤いづみ	(ふじ内科クリニック院長) いのちのケアから学んだこと
7月 1日	水谷 修	(花園大学客員教授 (夜回り先生)) こどもの叫び 大人の苦しみ
7月 8日	垣添 忠生	(財団法人日本対がん協会会長、『妻を看取る日』著者) 妻を看取る日—悲嘆と再生 妻をがんで奪われた専門医—
7月 15日	高木 慶子	(上智大学グリーフケア研究所所長) 悲嘆の実態 2
7月 22日	マーフィ長澤昌子	(9.11 アメリカ同時多発テロ遺族、医療経営管理理学博士) 9.11 テロ事件、夫の死、悲嘆から学ぶ—過去 10 年の私の生きる哲学—

「いのちの電話」は、生活の困難やこころの危機を抱えながら誰にも相談できないで、一人で悩んでいる人のための相談電話です。

1953年、ロンドンに始まり、現在世界各地に電話センターが開設されています。日本では、1971年に東京でスタートし、その後「いのちの電話」は拡大の一途をたどり、今では「一般社団法人日本いのちの電話連盟」に加盟する全国50センター（52箇所）が活動しています。昨今わが国では自殺が多く、1998年来、連続して3万人を超えており、「いのちの電話」の役割がますます重要なものとなっています。「いのちの電話」では、専門の研修を受けたボランティア相談員が年間73万件を超える電話相談を受けています。

当財団では、一般市民の方々の「いのち」や「こころ」を支える電話相談員のスキルアップ研修やスーパーバイジング（電話相談員対象のカウンセリング）などの取り組みに対し寄付助成を行っています。



人を支え、人に支えられる「いのちの電話」

社会福祉法人関西いのちの電話

理事長 李 清 一

関西いのちの電話は、24時間・365日、“眠らぬダイヤル”として、さまざまな心の悩みを聴き続けています。2010年総受信件数は23,848件（65件/日）、そのうち自殺を訴えてきた人は3,976件（11件/日）で全体の約17%を占め、孤独と絶望の中にあって「誰も相手にしてくれない」「何のために生きているのか」「死にたい」と訴える人たちが増えています。一本の電話を通して、苦しくて辛い気持ちが受け容れられ、その人たちが再び勇気と希望をもって生きていけることを切に願っています。

関西いのちの電話は、本年で創立38周年を迎えます。このように長きにわたり活動を続けてこられたのは、まずは、社会の中に相談電話を必要とする人が現実にもなおよ

く居続けているということ、第二には、研修を受けながら主体的に日夜その電話を受け続けるボランティア相談員がいるということ、第三には、いのちの電話の活動を物心両面から支えてくださる多くのサポーターがいるということ、この三者が常にリンクして存在してきたからにほかなりません。

2006年に自殺対策基本法が施行し、2007年には自殺総合対策大綱が策定され、ようやく行政からの支援が始まりました。それでも、現在の財政基盤の大半は、多くの個人、民間団体のみならずからの熱いご支援に拠っているという状況は変わりありません。そのような中で、JR西日本あんしん社会財団からの助成は、関西いのちの電話の財政基盤安定化に寄与していただいていると同時に、“無縁社会”と言われる現代社会の中で孤立化している人たちへの、言わば目に見えない支援でもあると確信しています。

年間自殺者数が相変わらず3万人を超えているという状況の中、一人ひとりのかけがえのない大切ないのちを守り支えていくために、時代の変化と共に“変わるもの”と“変わらないもの”を見極めながら、いのちの電話の課題に取り組みねばなりません。相談ボランティアへの参加アピール、よき聞き手となるための相談員研修の充実、自殺予防のための「社会へのメッセージの発信・市民のための啓発活動・他団体とのネットワーキング」、そして募金活動の促進と財政基盤の確立など、これらの活動のために引き続き、みなさまのご支援を心からお願い申し上げます。



助成対象となっている研修の様子



毎月10日にフリーダイヤル（無料）の
電話相談を受け付けています。
0120-738-556

いのちの電話とは…

- ・名前は告げる必要はありません
- ・相談内容の秘密は、必ず守ります
- ・お互いの宗教や主張は尊重します
- ・相談は無料です
- ・金銭的な援助はできません
- ・電話相談にあたるのは、定められた養成課程を修了し
相談員としての認定を受けたボランティアです



心の傷を癒すいのちの電話

～決してあなたをひとりにはしない～

社会福祉法人神戸いのちの電話

理事長 山口 徹

1981年6月、「神戸いのちの電話」は国内12番目のセンターとして開設されました。現在約160名の電話相談員が交代で月平均1,000件、年間平均13,000件以上の相談を受けています。その一方で、日本における自死者が年間3万人以上という状態が13年間続いています。この数字をどのように受けとめればいいのでしょうか。

相談の多くは「人生」「性」「男女」「夫婦」「対人」「精神衛生」に関するものでしたが、6,434人の死者を出した16年前のあの未曾有の阪神・淡路大震災以降、「多重債務」「老老介護」「虐待」「DV」等々多岐にわたる状況が惹き起こされました。

時には受話器を上げた瞬間から、怒り、不機嫌さや敵愾心を一方的にぶつけられることもあります。そのような相談電話を受信する時に必要なことは、「一貫して通底する問題は、相談者が思いを打ち明ける人のいない『孤立』状態にある」という認識に立つことです。加えて、ただ電話を受けるだけではなく、「あなたを決してひとりにはしません。私があなたの友となっていつも傍らにいますよ」という電話相談員の思い、願い、祈りを心から伝えていくことも大事な使命だと思っています。相談者にしかない嘆き、苦痛、憤りがあって自ら命を絶つ、しかし、ひとりの死であっても決して取り戻すことはできませんし、命を奪われた人たちの言葉はもう聞くことができません。

傷ついた人の心が本当に癒されるには長い時間が必要です。相談者やその家族の人たちが支えきれなかった思い、苦しみ、悲しさ、むなしさ、痛み、これからの生活への不安などを考えますと、私どもの責任と役割が拡大していることを改めて強く自覚します。そのためにも多くの方々のご理解とご支援

をいただきながら、電話相談員のさらなる質的向上とメンタルケアに向けての各種研修を強化し、人間が人間として生きていくことのできる社会の創造に一層努力を重ねていきたいと思っています。

そうした緊張感の緩むことがない現状にあって、電話相談員の傾聴力アップのための研修や相談者から寄せられる相談内容の理解、対応する電話相談員の心理的負荷へのケアの充実や他センターとの連携など、開所当時より抱えている課題は今も変わっていません。特に電話相談員の心のケアは、ここ数年大きな課題となっています。最近、貴財団からの支援で、前例がなかったスーパーバイザー（電話相談員対象のカウンセリング）研修が毎週1回実施できるようになり、電話相談員に対する細やかで適切なケアが可能になりました。この有意義な取り組みは今や全国のいのちの電話にも広がっています。自らの知識、技術を向上させようとする電話相談員への研修機会が増え、何より大きな勇気づけにもなっておりますことを末筆ながら心より感謝申し上げます。



助成対象となっている研修の様子

社会福祉法人
神戸いのちの電話

相談電話：078-371-4343

URL：http://www16.ocn.ne.jp/~kctc/

〔相談時間〕

平日 8:30～21:30 祝日 9:30～16:30

土曜日 8:30～日曜日 16:30（32時間）

※第4金曜日のみ 8:30～日曜日 16:30（56時間）

17 件の活動に対し、
1,343 万円の助成を行っています。

当財団では、大規模な事故、災害が起こった際の備えやその後のケアといった視点から「安全で安心できる社会づくり」に寄与する活動や研究に対して助成を行っています。今回は、JR 西日本財団 NEWS VOL.2 に引き続き、当財団が訪問させていただいた 5 件の活動についてご紹介します。(順不同)

手記集『伝えたい想い—犯罪被害者が紡いだことば—』の発行

NPO 法人大阪被害者支援アドボカシーセンター

大阪被害者支援アドボカシーセンターでは、犯罪・事故の被害者や遺族が置かれている厳しい現状を訴え、命の大切さを啓発するための取り組みを積極的に行っています。今回、犯罪・事故の被害者が執筆した手記集『伝えたい想い—犯罪被害者が紡いだことば—』が完成し、11 月 25 日に大阪市役所前で行われた「犯罪被害者週間」のオープニングセレモニーで手記集の一節が朗読され、道行く多くの方が真剣な表情で聞き入っていました。市役所ロビーでは「犯罪被害者週間」の啓発展が行われ、手記集も展示、配布されました。



手記集を配布する様子
(写真提供：NPO 法人大阪被害者支援アドボカシーセンター)

オリジナル劇『おじいちゃんの時計』

みんなでつくる学校とれぶりんか

1 月 16 日、阪神淡路大震災での人との出会いやボランティア経験などの実体験をもとに、震災の記憶を風化させることなく若い世代に語り継ぐために、オリジナル劇『おじいちゃんの時計』が尼崎市のピッコロシアターで上演されました。上演前にはライブ演奏が行われ、新潟県中越地震の時に倒れた杉の木から作られたコカリナの演奏や、ギターの弾き語りにより「人と人との繋がり



オリジナル演劇の様子

の大切さ」や「いのちの大切さ」を伝える歌が歌い上げられました。その後の劇では、パン屋を営むおじいさんの安否を尋ねて、被災後間もない神戸に入った耳の聞こえない青年と車椅子

の少女が、悲嘆や喪失感、不安と向き合いながらボランティア活動に取り組む人達と交流し、支え合うことの大切さに気付く姿を総勢 20 名弱の劇団員が懸命に演じました。今回のライブ演奏や演劇は、一貫して「人と人とのつながりの大切さ」や「いのちの大切さ」を訴えかける内容になっており、震災当時の記憶を思い出し、涙ぐまれている参加者もいました。

小学校における語り部活動

語り部 KOBE1995

語り部 KOBE1995 では、阪神淡路大震災から年月が経過し被災者の高齢化が進む中で、次世代との交流・協働活動による震災体験の継承



神戸市立だいち小学校での語り部活動の様子

や防災教育の活性化に取り組んでいます。神戸学院大学では学生と協働し、語り部と学生がアイデアを出し合いながら、震災を知らない子どもたちへの語り部活動に使用する教材を作成しました。1 月 17 日には、語り部が兵庫県内の小学校を訪問し、避難所となった小学校で起こった出来事をはじめ、震災での体験や防災に対する心構え、命の大切さについて、たくさん子どもたちに話をしました。

『多言語版鉄道あんしん利用ガイドブック』の作成

多文化共生センターひょうご

多文化共生センターひょうごは、阪神淡路大震災直後に多言語で情報提供を行った「外国人地震情報センター」を前身としています。多くの消防で採用されている多言語版救急時情報シートの作成など、日本で生活する外国人の生活支援活動を行ってきました。現在、



ガイドブック掲載の写真を撮る様子

公共交通機関を安全に利用するために必要な情報や公共交通機関利用中に事故や災害に遭遇した際の対処方法を多言語で記す「多言語版鉄道あんしん利用ガイドブック」の作成を進めています。このガイドブックは、駅や自治体、公的機関の外国人相談窓口配布される予定です。

『ミニ鉄道のイベント』におけるの救護活動

Basic Life Support KOBE



メンバーの方々

Basic Life Support KOBE では、日常生活における安全の確保や暮らしやすい地域づくりを目指し、AED の使用や心肺蘇生法に関する知識を身につけることのできる救命講習会の実施と各種イベントでの救護支援活動に取り組んでいます。

11 月 28 日にカワサキワールドで行われた「ミニ鉄道フェスタ in 神戸メリケンパーク 2010」では、看護師や救急救命士資格を持つメンバーが救護所を設置し、怪我をした来場者に応急手当を行うなど、救護活動支援を行いました。

H23 年度活動・研究助成対象件名

第2回目となった公募助成先が決定いたしました。今年度も大変質の高い、熱意あふれる多数のご応募をいただき、本当にありがとうございました。助成対象となった方々のみならず、今回ご応募いただいた全ての団体や研究者の方々が、「安全で安心できる社会」の実現に向けた素晴らしい活動や研究に取り組んでいただきますよう心より願っています。(50音順)

	応募数	助成決定	助成金額
活動助成	67件	20件	1,606万円
研究助成	39件	10件	1,369万円
合計	106件	30件	2,975万円

活動助成	特定非営利活動法人あすかコミュニティ	防災コミュニティを活かした安全・安心のまちづくり
	特定非営利活動法人ASUネット	癒しのコンサート、いのちのカフェ & 「4.25の証言」DVD制作、地域力をテーマに講演会開催
	應典院寺町倶楽部	寺院を拠点としたグリーン・コミュニティのネットワーク (主題:「ロスト・チャレンジ」のためのコミュニケーションデザインの実践)
	財団法人大阪府人権協会	ストップ! The 鉄道自殺・JR版
	大芝連合運営協議会防災部会	大芝は、安心 安全 守るぞ わがまち・みんなのいのち
	特定非営利活動法人オーシャンゲート ジャパン	子ども応急手当普及 & 水面安全サポーター育成
	関西学院ヒューマンサービスセンター	被災地佐用町における、住民主体のまちの復興を目指した、学生による支援活動
	特定非営利活動法人検定協議会	キッズ防災検定
	甲子園口地区まちづくり協議会	震災時及びその後に地域で着実に展開されてきた防災の取り組みを わかりやすく・きめ細かく次代に伝え、地域ぐるみで防災活動の輪を広げよう!
	NPO法人 Co.to.hana	シンサイミライノハナPROJECT
	「空色の会」 ～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～	「4・25 あの日を忘れない」 ～被害者の真の回復と、事故の風化防止、安全で安心できる公共交通機関の実現を願って～
	社団法人高槻市医師会	第5回災害医療救護訓練
	中越・KOBEBE足湯隊	足湯の「つぶやき」と「つながり」がつくる「安全で安心できる社会」モデルの確立・普及活動
	頭部外傷や病気による後遺症を持つ若者と家族の会 京都支部	高次脳機能障害者とその家族を支える活動
	灯火	第3回灯りでつながる夜
	西宮カウンセリング研究会	西宮カウンセリング研究会
	特定非営利活動法人日本レスキュー協会	セラピードッグ育成及び派遣事業
	フレンズ!川西フェスティバル実行委員会事務局	JR 福知山線列車事故 被災者支援募金イベント 第6回フレンズ!川西フェスティバル
	特定非営利活動法人LOVE&PEACE	子どもの目線でみた交通災害の予防と研修プログラム
	朗読 ういっしゅ	「命の大切さを伝えたい」 命をテーマの講演会と朗読の会

研究助成	神戸大学大学院保健学研究科 助教 上杉 裕子	膝関節疾患患者の公共交通機関利用時の不安や困難と対処に関する研究
	大阪バイオサイエンス研究所 研究部長 裏出 良博	簡易型脳波計を使った快眠法と居眠り検知法の開発
	兵庫医療大学 講師 佐野 恭子	高次脳機能障害者と家族における協働関係と主体性の構築に向けた支援 一家族会活動を通して一
	立命館大学理工学部都市システム工学科 教授 塚口 博司	交通行動分析に基づいた大規模交通ターミナル地区における歩行者の動線計画に関する研究
	和歌山工業高等専門学校環境都市工学科 教授 辻原 治	解析モデル作成と3Dビジュアライゼーションが自動で行える 利用者の利便性を考えた災害時避難シミュレーションシステムの開発
	奈良県立医科大学 教授 西 真弓	心的外傷後ストレス障害 (PTSD) 発症の分子基盤の解明と治療法の開発
	神戸女子大学家政学部家政学科 助手 西本 由紀子	公共交通機関におけるベビーカー利用者のバリアの実態と改善に関する研究
	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任准教授 八木 絵香	事故当事者が公的事故調査に参加することの意味 一事故当事者の語りの分析を通じて一
	京都大学大学院工学研究科 特定研究員 吉村 晶子	大規模災害時の倒壊建物等からの体系的救助救命活動のための専門訓練施設的设计資料集成の作成
	奈良産業大学情報学部 常勤講師 米川 雅士	災害時の状況把握用空中写真取得のための安価な自動航法ラジコンヘリコプター開発と実現

平成 23 年度の主な事業計画

(平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)

〈事業運営方針〉

平成 23 年度は、財団の設立趣旨を踏まえながら、「地域との連携、地域における共生」をより強く意識し、「いのち」や「こころ」を支え、共に助け合う社会の実現に資する事業を行ってまいります。

● 心身のケアに関わる事業

(1) 上智大学 グリーフケア研究所への助成

- ①公開講座「『悲嘆』について学ぶ」への寄付助成
- ②グリーフケアの実践に携わる人材養成講座への寄付助成

(2) 「こころのセミナー」の実施

- ・22 年度同様、“「いのち」を考える”をメインテーマに、支え助け合うことのすばらしさや生きる希望を実感していただける機会としてセミナーを実施

● 地域社会の安全構築に関わる事業

(1) 京都大学「社会基盤安全工学講座」への助成

- ・鉄道基盤設備を含む社会インフラの安全性向上に関する研究への寄付助成

(2) 公益事業の安全性向上に向けた活動等

- ・鉄道を中心とした公益事業の安全に関わる研究会等の検討・実施

(3) 「救急フェア」の実施

- ・心肺蘇生法の簡易講習等を通して、一般市民による救急初期対応（ファーストエイド）の重要性を啓発する「救急フェア」を京阪神地区の J R 各駅で展開

● 「安全で安心できる社会」の実現に関わる事業

(1) あしなが育英会への助成

- ・「高校奨学生のつどい」と小中学生を対象とした「キャンプのつどい」への寄付助成

(2) 関西いのちの電話、神戸いのちの電話への助成

- ・電話相談員のスキルアップのための研修やメンタルヘルスケアに関する活動への寄付助成

● 公募助成事業

23 年度は、以下の方針に基づいた、活動と研究に対する公募助成を実施

- (1) 事故、災害が起こった際の備えやその後のケア及び事故防止に関わる活動・研究を主な助成対象とする
- (2) 近畿 2 府 4 県に拠点がある団体の活動又は近畿 2 府 4 県にある大学等に所属する研究者の研究を対象とする
- (3) 活動助成では地域とのつながりを重視し、地域での新たな仕組みづくりに関わる活動に重点を置く

※具体的な募集テーマ等は、平成 23 年秋頃に決定



理事長
佐々木 隆之

去る 1 月、『こころのセミナー』を開催いたしました。感動の涙を流されながら講演に聞き入る参加者の方々の思いを肌で感じる事ができ、人と人とのつながり、そして「いのち」の大切さを強く感じる場となりました。「こころ」をテーマとした初めてのセミナーでしたが、大変多くの方がご関心を持たれていることを実感しました。今後も同様のセミナーを開催していかなければならないと思っております。3 月には『鉄道安全セミナー』を開催いたしますが、鉄道事業関係者だけでなく一般市民の皆様を含め、定員を大幅に超える多数のお申込みをいただきました。

こうしたセミナーが、「いのち」や「こころ」の問題についてあるいは鉄道の安全、ひいては地域社会の安全について考えるきっかけになれば幸いです。

この 1 年、まだまだ試行錯誤の中で事業を行ってまいりましたが、当財団はこの 4 月で設立 3 年目を迎えます。新年度は、皆様方のご支援やご指導をいただきながら、「地域との連携、地域における共生」をより強く意識し、事業のさらなる充実を図っていかねばと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

編集後記

今回は「こころ」や「いのち」をテーマに主催セミナーや助成先の取組みを中心にご紹介させていただきました。発行にあたりインタビューを快く引き受けて下さった関本先生や各団体の皆様など、多数の方のご協力いただき心より感謝申し上げます。手にされた方に少しでも各団体等の取組みや思いが伝わればと思います。

来年度は更に充実した内容をお届け出来るように工夫してまいりますので、ご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。(編集者：小山)